

# 言葉と動作の相互作用を探索実践 ハラサオリさんと

往復書簡、2020年5月-9月

ハラサオリさんへ

こんにちは、お元気ですか？

この間はオンライン・ワークショップありがとうございました。

サイト・スペシフィック性の話、そしてコップを使ったエクササイズ、楽しかったです！  
ワークショップ後に思い出した映像があるのですが、今回の手紙はその話から始めたいと思います。ダンサー・振付家 Alain Buffard が撮った、『My lunch with Anna』\*という映像です。Anna は Anna Halprin のことです。ワークショップで言及されていた Trisha Brown や、Yvonne Rainer も彼女に学んでいますね。

映像内では、Alain Buffard が Anna Halprin へ、ランチを一緒に食べながら色々な質問をします。制作のプロセスや日常の動作に関する実験、そして「スコア」という概念についてなど。また冒頭では、Anna Halprin が制作手法である RSVP Cycles の図を用い「Resource から Performance へ即興を通じて移行しながら、そこで生まれたものが Score になる」と説明しています。こうして書かれたスコアとしての言葉は動作のバックグラウンドとして機能していきます。『My lunch with Anna』という枠組み自体、Anna Halprin のパフォーマンス『Apartment 6』のスコアを引き受けているのかもしれませんが。つまりスコアがリソースへと再び向かっていくという見方もできますね。ここでは単なる言葉による対話だけではなく、スコアとしての言葉が動作をつくり、そしてまた動作が言葉を生むような、パフォーマンスタイプなやり取りが行われていきます。

サオリさんの作品『no room』を去年拝見したときも、こうした言葉と動作の関

係が気になりました。タイトルの言葉遊びから始まり、ダンスをしながら、ナラティブな言葉も常に発されていましたね。ワークショップの時に、動きをノートに記録するとおっしゃっていましたが、作品はどの程度まで事前に書かれているのでしょうか。

また、言葉と動作が相互に解説し合うだけでなく、両者が一見バラバラで何の関係も持たないような時もあったように思います。私が単に関係を見つけられなかったのかもしれませんが、サオリさんの中で言葉と動作はどのように位置づけられているのでしょうか。

もう一つ、『no room』に関して聞いてみたいことがあります。翻訳の問題です。言葉を使う作品の場合、翻訳をどうするか考える必要が出てくることもあります。作品で使用される言語は日本語でしたが、いつかこの作品を多言語に翻訳することはお考えですか？

あるいは、作品のサイト・スペシフィック性は、言語にまで及ぶのでしょうか。つまり、この作品がノグチルームという場所でしかなし得ないように、言語に関しても、日本語でしかなし得ず多言語への翻訳が不可能な作品なののでしょうか。

ノグチルームへは、日本語を話さない友達と訪れました。ベルリンとパリから来たBLESSもその場にいたのを覚えています。私はこの作品において言葉の部分はかなり重要だと思い、友達が意味を理解できないことがぐやしかったのですが、彼自身は落胆した様子を全く見せていませんでした。実際、彼は言葉以外のところで何かを理解していたようです。一体それが何であるのか、私にはわかりません。

このことに関して、運動分析の専門家であるHubert Godardの、Prémouvement（前・動作）という概念が少し参考になるかもしれません。以下に

短く引用します。

「私たちは、重さや重力に対するこの態度をプレ・ムーヴメントと呼ぶことにします。それは私たちが動く前、ただ立っているという状態の中にもすでに存在し、実行しようとしている動作の表現を担うものです。」\*\*

例えば、机の上に置いてあるコップを取る動きをしてみましょう。Hubert Godardによると、コップへ実際に腕をのばす前の時点で、体の中ではすでに腕をのばすための何らかの姿勢が整っている。そしてそれは無意識のうちに行われているとのこと。これがプレ・ムーヴメントですが、こうした動作の土台であるプレ・ムーヴメントは、ダンサーにとって単に振り付けを実行するよりも重要である、と彼は言います。また、アレキサンダー・テクニクの理論を用いながら、こうした土台は他者と分かち合うことが可能、つまり共感による動作の感染が起り得るとも述べています。

この考えをレクチャーパフォーマンスに当てはめると、以下のように考えられるかもしれません。

パフォーマー：

言葉を発する前、何かを願った時点で、体はすでに何らかの動作を開始している。

観客：

言葉を意味として理解する前に、動作の感染により、体はすでに何かを捉えている。

もちろん、実際はこんなに簡単ではありませんが…。言葉は単に頭で理解するだけのものではないという、曖昧な確信を後押ししてくれる概念だなと思っています。

最後になりますが、今書いたことに繋がるようなエクササイズをひとつ、別紙で入れておきます。Meg Stuartがステイホーム期間に発表したHOMEWORKから1つ、そこから私が発展させたものです。レクチャーパフォーマンスが主題なのに、言葉になる前の動作に関するエクササイズを提案してしまいましたが、良かったら試してみてください。

以上、あまり整理しきれないまま色々書いてしまいましたが、言葉と動作の関係やその翻訳、言葉もしくは動作になる手前の何かに関して、サオリさんがどう捉えているのかお聞きしたいです。また、関連するエクササイズを1つ交換していたら幸いです。その他、思いついたものがあればなんでも。逸脱も大歓迎です！

\* 『My lunch with Anna』は、以下のリンクより視聴可能。ちなみに、フォークやサラダを使いながら、サオリさんとやったコップのエクササイズに似たものをやっているシーンもあります。

<https://www.numeridanse.tv/videotheque-danse/my-lunch-anna-0>

\*\*原文はここから：Hubert Godard, Le geste et sa perception, La Danse au XXème siècle, Marcelle Michel, Isabelle Ginot, Bordas, Paris, 1995. p.224.

Meg Stuartのエクササイズ

BoCA onlineより：

<http://www.bocabienal.org/evento/homework-meg-stuart/>

Solo Scores for Now (2020), Score 4の後に、

—同じことを、体の1つの箇所に集中して行う。

Ex. My knees are too exhausted to tell you

My eyes are too hungry to tell you ...

—同じことを、体の違う箇所と違う感情で同時に行う。

Ex. My finger is too horny to tell you, and my hips are too honest to  
tell you...

ユニより





ユニくん

こんにちは。サオリです。

まずお返事が大変遅くお詫言申し訳ありません。内容について考えられている内に、リハーサルや次回変わる状況への対応に追われてしまいました。というのはいくつかある理由のなかで最もおそれやすいもので、別の理由として、「手紙」に精進するまで手が動かなくなっておりました。ユニくんからの手紙目を通つ間は、送る封筒を選んだり字の練習をしたり、楽しく過ごしていたのですが、いざ書くとなると、その難易度に慣れていないなかには進まず— / スタリシ— を通り越した普通の不慣れたやりとりとなつてしまい恐縮です。

さて前置きと長い訳が長くなりましたが、表現のお話へ移りたいと思います。

ユニさんのお手紙を読んで、改めて思ふたのは、パフォーマンス表現が精密な日本語と共に批評やアーカイブとして語られてきた歴史は欧米

のそれに比べると浅く、重要なキーワードは「21世紀」  
カタカナの外来語で代用されるが、専門用語として  
そのまま定着しているということでした。ハイコンテクスト  
に「知らざるを得ず」、これを英語言語として国内シーン  
で議論をするのたり、作品を放映したいと異うと  
活動範囲が限られてしまうように感じます。ダンス  
でも演劇でも「その他」の身体表現に関  
する研究や批評が積極的に開発されていないこと、  
外国語の資料も読まれづらいことにより、世界の  
スタンダードから、日本、ただし日本語がじりじりと離れ  
をとってきている、というのが私の視点です。

スタートの放映はしていますが、これは私がドイツと  
日本を往復しながら活動する中でよく引、かがはな  
した中で共有させて頂きました。ユニさんは、パリと  
京都を往復されているのでしょうか？ 複数の都市  
で発表やリサーチを兼ねる上で、どんな強みがある  
のか、またはないのか、ぜひお聞かせ頂きたいです。

本題に入ります。主に『No room』の解説と  
フィルムメントの解説。最近のクリエイションについて  
書いていきます。

『My lunch with Anna』拝見しました。17日と  
まじいかな。私とイスとかにむパフォーマンスライブ  
やりとりを見て Simon Fujiwara というアーティストにも  
『両方のためのリハーサル』という作品を思い出しました。  
スコットにも関係しそうなのですがまだ脈絡するので、  
まず『No room』のことから…。

〇と〇まで事前に決められているのか。

当時使用した台本を同時しました。これはクレー  
ションプロセスというより、もって実務的なもので  
コラボレーター達や、テニカルチームのために作った  
音盤のようなもので、サクサクと区切った空間・  
時間ごとに、異なり拒いと各自の軌跡が二のように  
決まっています。このレイヤー1と2の上演回でも変わり  
ません。各演者の動きとして振付的に決まっ  
ている。繰り返し練習をしたのは、2人のデュオダンス、  
3人のテアトルダンス、4人のエニゾと9行進、私の1人子  
(17年夏同好、18年)

ルームにまつわる解説、作品冒頭の語注念です。  
最後のシーンは、規則を守りつつ、OKとNGの境  
を探るというのですが、これも大きな流れ、各自  
の動線、探る対象のホーダー（走、ていいのがそれ  
庭にまいてもいいのか？大きな音を出してもいいのか？）  
は決まっています。ダンサーの動き、ドラマーの演奏  
私のセリフは即興です。

「台本」へ話を戻すと、「この表に名前がないときは  
勝手に過ごす」とどこにいてもいい、何をしてもいい。  
次の準備や移動だけ忘れられない」という指示を出  
してあります。各自のプロポジションがバラバラで、  
構造も上記のように決まっているような、いい  
ような感じなので、当然作品全体のフォーカスが  
ぼやけるのですが、作品中盤から演出家の私の  
語りやダジャレなど言葉によって観覧者と意識  
を共有しながら、最後のカタルシス的なシーンへ  
向かっていくような構成になっています。しかし  
観覧者のころは / ゲテ・ルームの持っている圧倒的な  
空間の馬力が、約90分のカオティックな状況を  
ひとつの体験としてまとめてくれる、観覧者も

“そういうもの”として受け入れざるを得ない、という  
響りと強引な作品だったと思います。

全体のスコアと流れはこんなところで、その中で  
特にスコアと動きの関係にフォーカスしていたのは  
先述のテーブルダンス3人がドローインを描くシーン  
でした。ここでのスコアは言葉ではなく、音楽です。  
これは、描くべき軌と事前に共有していることで  
3人のユニゾンと、3つの<sup>軌</sup>画が出現するというものでした。  
scoreに沿った movement が生まれ、軌の上に  
result が残る、それが archive で score で…  
という、1つの循環でもあるのですが、それぞれを  
ダイレクトに結びつけられようかと思いました。

〇言葉と動作はどのように位置づけられているのか  
これは私の中でまだぼんやりとしたメソッドが構築  
されていませんが、『NO 100M』でも使った言葉遊びは  
その場のイメージを増幅、変更させる手段として重宝  
しています。特に母国語の日本語なら細かい

ニュアンスを操作しながら意味とその場のムードを様々なスライドさせていくようにスラセるので、鑑賞者とのコミュニケーションにおいて、ときに寄り寄り、ときに置き去りにするというダイナミズムを生み出すことができます。私が面白いと感じるのは、そこで設定された制作者と鑑賞者の距離によって目の前に行われている動きの解釈が大きく変わることです。ですから、私の中で言葉と動きについて考えるとき、その小かつの要素の間に必ず常に鑑賞者が存在しているのだと思います。

言葉と身体がダイレクトな翻訳関係にある明確な例として手話があるかと思いますが、かつては、このような振付を試みていたころもありますが、今はその逆へ向かっています。正確な関係を突きつめた振への興味は失われてしま、たというが、そこにアートの92目はないと感じてためです。『no room』で私が即興的に発語しながら動いていたシーンでは、言葉と動きをあえて距離させました。これはダイナミズム的な興味、日本演劇のフェル  
アーツ

その周辺のアーティスト(山崎太一、大谷龍生ら)の  
取り組みに多少影響を受けたものです。口から発する  
テキストは意味の遊。にそのから始め、言葉遊びに  
よってイメージをふくらませつつ、身体は建築に接触  
れる。録音装置をたぐる、など物理的空間に  
定着させる、といった飛躍です。完全オリジナル  
のメソッドではないにしても、これはノグチ-ルムでの  
サイトスペシフィック表現にハマるものだと考えて  
いました。

この作品を多言語へ翻訳することを考えているか。  
Yes イサム・ノグチとその父が、アメリカと日本という  
二ヶ国のアイデンティティの狭間で苦しめたながらも、  
そこに基づく成功を収めたことを考えれば、  
最低でも英語へ翻訳、上演されるべきだと思  
います。しかし、先述の言葉遊びによる時空の  
チューニング部分は直訳もできないし、私の語  
学力では即興でも脚本でも難しそうです。  
ネイティブかつクリエイティブな翻訳家1-ドラマ  
ツルギーとして関わってもらわなくては、表面的に  
別々の作品に作りそうとすね。 other room...

## ★BLESSとのコミュニケーション

BLESSには、コンセプト、1クォーターの歴史、意味の通った台詞部分だけ翻訳して渡してあります。しかし制作プロセスにおいて、私たちには具体的な意味の整合性以上に、観客とのコミュニケーションについて着目した指摘や提案をしてきていました。そもそも二人は、上演芸術全般に対して非常に懐疑的で、いわゆるこの“上演”というフォーマットは演出家がある権利を行使して、観客を黙って座らせておくことが出来るという特殊な力学の上に成立してきたものですが、すでに99年のアーティストがこれを壊すための作品を発表しています。私もその一人でありたいと思っただけで、BLESSの二人は私以上にそうした“懐疑的瞬間”に敏感で、プレストでもリハーサルでもその議論にかなりの時間を費やしました。そうしたやりとりを通して、結局私はまだまだ舞台人として懐疑性のある程度肯定している！ということを実感しました。また、この懐疑性に対するセンサーは、非言語的なものであると感じ、その点については



BLESSの視点を借りながら相性を打破していく  
ことに努めました。その過程で、<sup>14</sup>nooism<sup>15</sup>を  
通じた我々の試みは、あるファンタジを創り出す  
theatricalなことではなく、現実の状況をデサイン  
することであるという点で合致しました。"現実"とは  
主に鑑賞者の存在です。

コレラントをChoreographerではなく、Situation  
Designerにしたのはこのためです。

ユニさんの二人を女始めとする日本語も理解し  
た方が、か何を受け取ってくれたのかは、機会  
があればぜひおうかがいたいといふことが、  
私たちがBLESSと日本語を介するに取組んだのは  
非積戻性的デサインだと思っています。

#### ☆プレム・メントの解釈

プレム・メントについては存じ上げなかったのが、  
また完璧に理解できていなければいけないのでは  
あるといふアフォーダンス理論と交差させられ予感  
しました。コップに対して生まれるプレム・メントとは

すべしにコップと人体の動作関係を学習した人  
同士が共有できるものかと思います。アフォーダンス、  
デザインもまた、人が社会的に学習した色、形、  
空間に対するセンサーを利用して、特定の動きや  
動作を誘発するものです。(他にも多様な解決  
があります。)ちよとこれは「裸足つないけ」なので、  
何かのエクササイズへ応用できたらいいですね。

そして「動作の感染」という表現がこのパフォーマンス  
についてほんとにも興味深く感じられました。  
ご存知かと思いますが、ダンスのテクニックのひとつに  
「コンタクト・インプロビゼーション」というものがあります。  
2人以上での身体的接触を前提に、双方の重力  
関係に依りて生まれる動きなので、現在のこの  
コンタクトレス社会ではまさにタブーなダンスです。  
今私がパフォーマーとして参加しているプロジェクトでは、  
この感染危機に対する(やむを得ない)レスポンス  
として、「ホスト・コンタクト・インプロビゼーション」の開発  
をリサーチのひとつとして行っています。2人のパフォーマー  
が、2つのオブジェクトを介して接触なく重力を

共有するというものです。9/19、9/20にベリンの  
Bethanien という会場で上演される予定ですが、  
まだベリン-パリ間の移動は厳しいですよね。  
パリにも行きたいのですが、プロセスの写真だけ  
同封します。言葉は少し汚いものです。

「読書」によるコミュニケーションをこれまで自分が  
どう振ってきたか、考えてみえています。内観に関して  
だけ言えば、プロフェッショナルトレーニングを積  
んだパフォーマンス、そうではない観客のそれには  
圧倒的な差があるかと思えます。その解像度  
の差を埋める手探いをするのが、言葉なのか？  
そんな気がしてきましたが、完全に見当外れという  
可能性もあります。

この辺りから一度締めたかと思いますが、矛盾  
した点や、意味不明な箇所があれば、ぜひ  
ご指摘ください。別紙にエクササイズも  
添えました。

私は一度まだ10~11月に日本へ帰国する予定です。  
そして、これはあまり現実的ではないのですが、10月の  
半ばには韓国で開催されるパフォーマンス・アーツフェ  
スティバルを鑑見に行きたいと思っています。それ  
以外の某期間は 本拠地・東京を中心にリサーチを  
しています。

ユニさんはどうされますか？ 直接お話しできる  
チャンスがあれば嬉しいですが、次のお手紙の  
交換を楽しみにしています。

引き続き、どうぞよろしくお願い致します。

2020.8.25

ハウサオリ

サイズ NO ROOMのクリエーションより

① 同封したドローイングをペンで描く

② 指、セシ、鼻、その他どこでも、  
身体の一部で同じく描く

③ 別の紙に同じ線をペンで描く

最近、空間を介さないユニゾンする方法を考えていて  
このドローイングを言葉に置きかえることを試みて  
います。言葉というより、「声」なのですが、自分で  
始めたラジオ番組で、振付を電波で飛ばし、  
届いた先で起きている(であろう)動きたちを  
録音する、という遊びです。「右手を上にあげる」  
という声の指示1つに対して複数の方がどう動き  
が起きているはずですが、同じスコアならユニゾン  
と呼んでもいいのでは、と思っています。これを  
ラジオ番組のメディアアートのアプローチで制作に  
したいと思っています。



## エクササイズ開発プロトコル、2021年2月

ユニ

- 1 「ことばと動作の相互関係」を念頭に作ったエクササイズを、紙に書く。
- 2 写真に撮って送る。

↓

サオリ

- 3 受け取ったエクササイズに回答して作った新たなエクササイズを紙に書く。
- 4 写真に撮って送る。

↓

ユニ

- 5 受け取ったエクササイズに回答して作った新たなエクササイズを紙に書く。
- 6 写真に撮って送る。

↓

これを繰り返し、5往復・10エクササイズ行う。期間は、1日おきくらいで集中的にしても良いし、1週間に1往復とかでも。要相談。

↓

サオリ

最後に、紙に書いたエクササイズ（5枚）をユニ宛に郵便で送る。

エクササイズ ↑ FeV.

サオリさんのエクササイズから  
サオリさんへ

1. 動詞をひとつ思い浮かべる。
  2. 空間に、その動詞を書く。  
筆は任お任せ。
  3. 異な。リズムで動作を話し、  
ベストな書き方を見つける。
  4. その動作を行いつつから、  
動詞がもともと持つ内容を果行する。
- ④ 頭で「空間に大きくゆくり  
「わらう」と書きながらわらう。

2 = 1)



## エクササイズ②

1. 豆皿の中で水を想像する
2. その水がたたる振音をひたつ選心
3. コップ一杯の水を飲む
4. コップから皿の中へ移動した水が  
ふたで遮んだ振音をたたるように動かす
5. 動かすのをやめる
6. 皿の中にある水の振音がおさまるのを待つ
7. 水が完全に静かになるのを  
想像できたから終了

2021.2.2 TTYY

エクササイズ 3 Feb.

2 Feb のエクササイズの水から  
散歩をする人へ

1. 散歩に出かける。
2. 道でそれ違ふ、人間以外の  
ものの動きを記憶し。  
自分の身体でまねをする。
3. 帰ったら、それ違ふ、たものの  
リストを紙に書く。
4. 書かれた二エはから、もう一度  
動きを再現する。

2 = より。

## エクササイズ 4

1. 今日の日付と  
月末までの日数を確認する  
例: 2/5 → 23日
2. 指折り数えて待つ気持ちを  
想像しながら その日数分  
身体の好きな箇所をゆくりと  
しつづつ折っていく。
3. 1回折った箇所を戻すのをカウントする
4. 最終まの目を折ったら  
ひと呼吸おいて折りを戻す

2021.2.5 甘オリ

エクササイズ 5.

できれば 2人で行う。

もし 1人の場合は、録音機 (スマホ等)  
を用意する。

1. Aは、動作を命令するフレーズをいくつか  
書きとめる。10分間など時間を区切るのも良い。
2. Aは、フレーズをひとつ、Bに伝える。
3. Bは、そのフレーズに反応する。  
ただし、否定形は使わない。  
Ex. 「指を振ろう」に対し、ただ「振らない」  
という応答 (つまり静置) はしない。  
「はいを叩く」など新しい動作で応じる。
4. Bの動作が終わったら、Aはすぐに次の  
フレーズを伝える。2-4をくり返す。

1人の場合:

書きとめたフレーズを読み、録音する。

フレーズとフレーズの間は 10秒 ~ 20秒くらい。

録音を再生し、上記3を行う。

## エクササイズ 6

1. 手振動やふる元の振音をひたつ機が

例 ぶるぶる

2. A4の紙にその音をついている

2文字を大きく書き出す

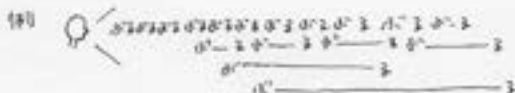
例

ぶる

3. 振音をなるべく遅いスピードで

継続的に発音する → スピードを遅くしていく

例



4. 同じ音の流れを

身体全体 2つは一部で体験する

= 「ぶる元」から「ゆれ」へ移行する

2021. 2. 11 7月1日

## エッセイの書き方

1. 自分が生まれる前の年代の作品を  
ひとくくりにする。


You Tube 等で動画を拝見。


(お別れ長くないもの。Mary Wigman.


Isadora Duncan の作品や

Yvonne Rainer の Trio A.

ハザードのビデオ等)

2. 映像を真似して踊る。
3. 真似する自分の動作に  を  
見つける。



4. 場所を変えて  を試す。  
家 → 屋外、都市 → 自然 等々。

5.  の読み方を決める。  
なるべく小さい文字に斜線を書く。

← この5.1.1.1  
も、と小さく。

12 Feb. Yuni

## エクササイズ 8

1. 仰向けまたはうつ伏せに寝て  
身体の力を抜く
2. 目を閉じる
3. 左右の手の指から1本  
左右の足の指から1本  
それぞれ選び、その先端に意識を向ける
4. 目を閉じたまま  
意識を向けた2箇所との距離が  
なるべく遠くになるように身体の形を変えて  
(他の箇所はどんな状態になってもよい)
5. この時の腹の筋肉の状態に  を見つける
6. 目を開ける
7.  を保ったまま、2箇所への意識を戻し  
その2点をゆくりと接触させる


2021.2.13 せおり

## エクササイズ 9

(今のところ実現は難しいかも...?)

2~20人程度で行う。

それぞれ本を1冊用意する。

1. 同じ空間で、本を声に出して読む。
2. 他者に耳を移せながら、  
自分も朗読する。
3. 他者の朗読の方法に自分のそれを  
同期する。
4. 共通の  が生まれたと  
思ふため、朗読をやめる。  
— 沈黙 —
5. 朗読の方法を変え1-4を  
くり返す。(早口→ゆっくり、  
おやみ声→大声 など)

By Fou Yuni



## エクササイズ10 (屋内・屋外どちらでも可)

1. 周りを見渡して発見したものを  
以下の4つに分ける

- ① 本が見える、触れる ... ハン、ソップ、靴、  
椅子、壁紙、窓のガラス etc
- ② 本が見える、触れない ... 天井、コップ、ガラスの中身  
椅子、窓のガラス等
- ③ 本が見えない、触れる ... 空気 etc
- ④ 本が見えない、触れない ... ①-③以外のすべて

2. 自分の身体へ意識を向けて  
1と同じやり分けをする

例

- ① 足、目、ツメ etc
- ② 血管 etc
- ③ 指、鼻(の先)、耳の骨 etc
- ④ ①-③以外のすべて

3. 4つに分けられた身体の部位を  
ひとつずつ順番に動かしてみる

 × 4 を発見する

2021.2.18 寺ナリ